

第 35 回日本サイコオンコロジー学会総会
ポスター発表

専門医療機関連携薬局において、がん患者のバッドニュースに
かかりつけ薬剤師として寄り添った事例について

総合メディカル（株） そうごう薬局 天神中央店
本田 雅志

【はじめに】2021 年 8 月より専門医療機関連携薬局の認定制度が開始され、その対象疾患としてがんが指定された。今回、専門医療機関連携薬局の薬剤師が、かかりつけ薬剤師として長期間患者を担当することで、患者がバッドニュースを乗り越える一助となったと感じた事例について報告する。

【事例】A 氏、60 歳代、女性、卵巣がん、肝転移。夫と二人住まい。X 年 7 月に外来化学療法開始。それから3年間、かかりつけ薬剤師として、薬局窓口での応対や電話によるフォローアップを計 51 回実施。X+2 年 2 月 35 回目の応対時、放射線治療後の診察で、がんが進行していたこと、頼りにしていた放射線科医が異動となったことを吐露された。「今まで頑張ってきたつもりだった」「一番話を聞いてくれる先生がいなくなってしまった」とつらい気持ちを打ち明けられた。傾聴した上で「Aさんの頑張りはずっと担当していた私も知っている。主治医もきつと分かっている」と寄り添ううちに、「主治医の先生にも改めて相談してみる」と前向きな返事をもらった。X+3 年 1 月 (47 回目)、電話にて相談あり。「治験を受けられるという希望を持っていたが、病院から突然『受けることができなくなった』と連絡があった。私はどうすればいいか」と訴えられた。治験を受けることを楽しみにしていたことを聞いていたため、患者が受けたショックに共感した上で、自身が納得するまで事情をひとつひとつ確認するようにアドバイスした。その後来局され「病院でも冷静に話を聞くことが出来た。今できる治療を、体調を整えながら続けていきたいと思う」と話された。以降、治療を再開し、来局継続中。

【考察】がん患者は長期継続的に治療を続ける中で、必ずバッドニュースを経験する。その時に専門医療機関連携薬局の薬剤師が長期に渡り寄り添うことで、バッドニュースを乗り越えるパートナーの 1 人となり得ると気づかされた事例である。